

外国語活動による小学生のコミュニケーションに対する動機づけの変化

Developing motivation of communication through foreign language activities in a grade school

次世代教育学部国際教育学科

オチャンテ・カルロス

OCHANTE, Carlos

Department of International Education

Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部学級経営学科

川崎 由花

KAWASAKI, Yuka

Department of Educational Administration

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：小学校外国語活動，コミュニケーション，異文化体験，動機づけ

Abstract : Communication skills among elementary students have been getting weaker recently. In light of this fact, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan set a goal for students to acquire communication skills through activities done in a foreign language. In this study, we introduced elementary students to international culture to try to find their motivational change in communication. First, we gave them a lecture about Peru and “folklore,” a traditional Latin American music. We played some folklore tunes with ethnic musical instruments. Then students tried to play the instruments and put on native Peruvian clothes. We also conducted a survey in the form of a questionnaire before and after the above activity. The results showed that the activity in this study may have motivated the elementary students to communicate more productively with other students, teachers, and people from foreign countries.

Keywords : Foreign language activities, communication, foreign cultures motivation

I. はじめに

平成23年度から正式に公立小学校において外国語活動が必修化された。学習指導要領には外国語活動の目標が次のように示されている。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。(文部科学省, 2009)

これは、外国語を通じてコミュニケーション能力の素地を養うことであり、決してただ単にその外国語(多くの場合が英語であるが)でコミュニケーションが図れるようになるという意味ではない。もちろん、英語のスキルを身につけることも目標の一つではあるが、ここでいうコミュニケーション能力とは、そのスキルに加えてコミュニケーションに対する積極性を含んだ情意面が求められていると解釈すべきであろう。

外国語活動を行うことにより、人として他者とコミュニケーションをとりたいと思う気持ちを子どもたちに起こさせること、そして実際にコミュニケーションがとれるようになることを目的としているのである。

齋藤孝(2004)は、コミュニケーションには情報と同時に感情のわかちあいが行われており、情報や知識だけのやりとりではコミュニケーションは成立しにくいと述べている。言い換えれば、情報・知識を持ち合わせていても、それらを伝達する際に適切な感情を伴わなければコミュニケーションに失敗してしまうということである。

言語能力と伝達能力に関して、コミュニケーションの民族誌学(Ethnography of communication)の創始者であるHymes, D. (1972)は、言語運用においては文法知識だけではなく社会言語的・社会文化的に適切な知識が必須であり、伝達能力(communicative competence)、つまり、コミュニケーションを行う能力には情意的側面が必然的に付随するとしている。

また、学習指導要領に上記のような目標が掲げられた背景には、子どもの対人関係や対社会関係能力の低

下、つまり、コミュニケーション能力の低下があげられる。

広瀬・幡山 (2012) は、現代の日本人は子どもも含めてコミュニケーションを苦手とする人が多く、コミュニケーション不足からトラブルに発展することが多いと述べている。「Monster Parent」の問題についても、はじめは小さなボタンの掛け違い、つまり、コミュニケーションの齟齬が原因ではないかとし、コミュニケーションさえうまく取ればその問題の多くは未然に防げるのではないかと指摘している。その上で、「外国語活動」は子どもたちのコミュニケーション能力を伸ばす最適な学習法だと位置づけ、ALTとの連携を図りながら「英語は楽しい」と思えるような授業展開を提案している。

一方、阿部 (2009) では、福岡市の85の小学校に在籍する3～6年生を対象にアンケート調査・分析を行った結果、「ALTと英語で話したい」「英語で話すのは楽しい」という意欲・関心はどの学年でも高い平均値を示しているが、学年が上がるにつれ下がる傾向にあると報告している。さらにこの分析から、中学年の児童は英語活動の楽しさだけで意欲が高まるが、認知的に発達した高学年の児童においては、楽しいだけで動機づけを高めるのは難しいとしている。

MacIntyre, P. et al. (1998) は、コミュニケーション

への意欲 (Willingness to Communicate) に与える要因の構造を図に表している (Figure 1)。この図の中で、第4段階から第6段階 (Layer 4～Layer 6) をコミュニケーションの過程における一定の持続的な影響 (“stable, enduring influences on the process”) として、学習者の性格や自信、社会的状況、グループ間関係、人間関係などがあげられている。これらの段階の上に位置する第1段階から第3段階 (Layer 1～Layer 3) には、L2の使用、特定の相手とコミュニケーションをとりたいという気持ちやコミュニケーションに対する自信などが相当するとしている。MacIntyreらは、第4段階～第6段階をあまり変化しない一定の影響ととらえているが、小学校の外国語活動では、学びの環境に変化をもたらし、日本人である児童と外国人であるALTの先生とのコミュニケーション、つまり、グループ間のコミュニケーションを促す点において、筆者らは不変のものではなく変化の期待できる活動だと考える。

さらに、小学生のコミュニケーション力を高める実践として廣岡ら (2005) は、三重県津市の小学生を対象に4か月にわたって全6回の活動を行っている。活動には、「友だち紹介」「あいさつ」「モノづくり」「ゲーム」などが含まれ、協力する力、観察力などが養えるようなプログラムが組まれている。一連の活動を通し

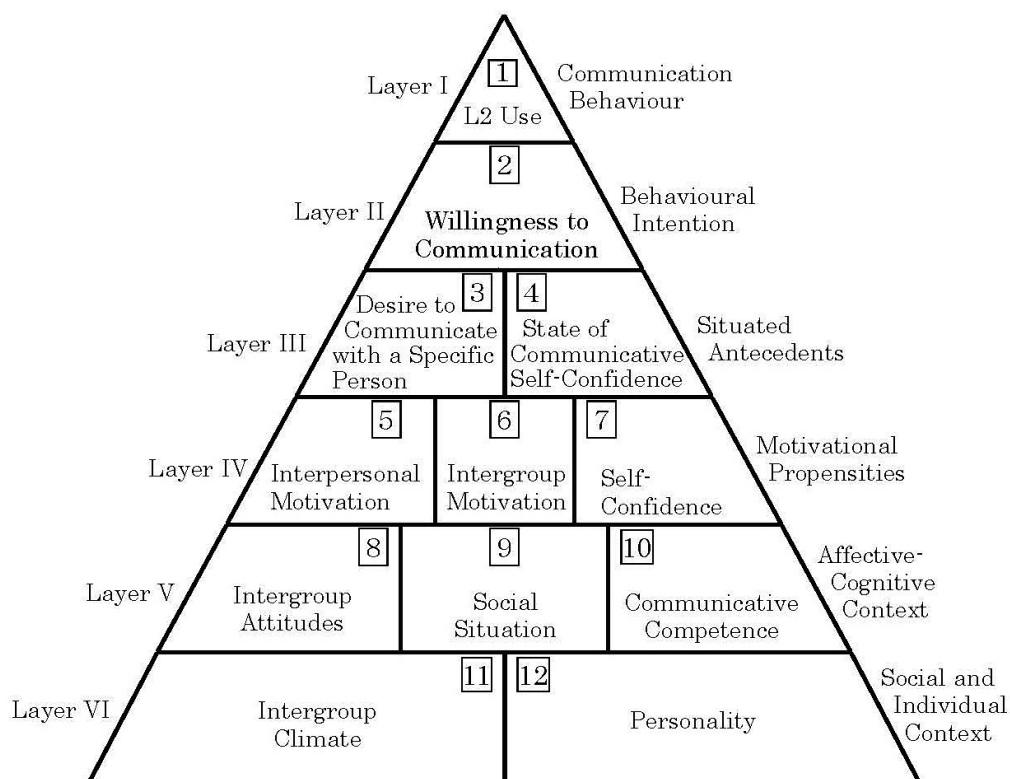


Figure 1. Heuristic Model of Variables Influencing WTC (MacIntyre, Clement, Zoltan, & Noels, 1998)

て、子どもたちは「具体的に友だちとの関わりややりとりの仕方などコミュニケーション力についても刺激を受けた」とし、保護者からも子どものコミュニケーション力についての感想が聞かれ、活動を行うことでコミュニケーションに対する意識の変化があったことを報告している。

これらの先行研究で得られた知見を踏まえ、本研究では、岡山県のN小学校6年生を対象に英語、スペイン語を交えながらペルーの文化を紹介し、民俗音楽等の体験を実施した。児童たちのコミュニケーションに対する意識・動機づけの変化を活動の前後で比較し検討する。

II. 活動の概要

1. 日時

平成24年9月7日、10時30分～12時30分の120分間。

2. 対象

岡山県N小学校の6年生12名（男子4名、女子8名）

3. 場所

岡山県N小学校の音楽室。

4. 活動実施者

岡山県K大学教員2名（以下、活動実施者A、活動実施者B）。活動実施者Aはペルー出身でスペイン語母語話者。活動実施者Bはオーストラリア出身で英語母語話者。

5. 活動に至った経緯

平成24年6月にN小学校の校長より活動実施者Aに活動についての連絡があった。N小で使用されている音楽の教科書には「世界の音楽に親しもう」という単元があり、児童たちはいろいろな国の音楽を学習している。その一環として、実施者Aがペルー出身であることからペルー音楽を紹介してもらえないかとの依頼を受けた。K大学学内で検討をし、本活動は地域の小学生たちの国際理解を促進する意義のある活動であることが示されたため、支援を決定した。

6. 目的

前述の「世界の音楽に親しもう」という単元には、「フォルクローレ」が紹介されており、今年度のN小

学校の音楽の授業ではフォルクローレを中心に学習計画が立てられている。「フォルクローレ (folclore)」とは、英語の「フォークロア (folklore, 民俗学)」がスペイン語化したものであり、日本では主にラテンアメリカの民族音楽のことを指す。

フォルクローレの授業で、ペルーの楽器や祭事などについてペルー出身の講師から直接話を聞くことにより、子どもたちの民俗音楽理解を促すことに加えて、ペルー社会の理解へとつなげていくことを目的とした。フォルクローレをきっかけに、子どもたちの国際社会への関心・意欲を高めるために、本小学校では総合的な学習の時間に世界の国々について調べる学習も平行して行っている。

7. 活動の流れ

- ①自己紹介（5分）
- ②事前アンケート調査（5分）
- ③国紹介（ペルーという国の様子）（35分）
休憩
- ④「フォルクローレ」についての講義（10分）
- ⑤実施者によるフォルクローレ演奏（20分）
- ⑥児童たちの民族楽器演奏・民族衣装着衣体験（20分）
- ⑦事後アンケート調査（5分）
- ⑧給食 英会話

III. 活動の様子

1. 自己紹介

まず、活動実施者Aが母語であるスペイン語で自己紹介をした。担任の先生、および、N小学校の関係者から紹介を受けずに、予告なく始めた。これは、アンケート調査で問う、外国人に対する児童の不安感を測るため、意図的に行われた。子どもたちにとってはスペイン語を聞くのは初めてだが、真剣に、そして、不思議そうな表情で聞いていた。途中で質問をしたり、発話を遮るような行動はなく、紹介の内容がわからなくても傾聴意識は極めて高いことがうかがえた。ここには、言葉の理解の度合いにかかわらず、コミュニケーションの一部である相手の話を聞くという行動が示されていると解釈できる。

活動実施者Bは自身の母語である英語で自己紹介を行った。児童は英語が聞きなれた言語であるからか、少し穏やかな表情になり、聞き取れる単語にはうなずくなどの反応を示した。

2. 事前アンケート調査

音楽室で集団で事前アンケートを行った。まず、担任の先生と音楽の先生がアンケート用紙を配付し、アンケートの趣旨、および、記入方法について説明を行った。子どもたちは一人ずつ回答をした。全員が記入を終わった時点でアンケート用紙が回収された。記入時間は5分程度であった。



Figure 2. アンケート回答の様子

3. 国紹介

事前アンケート終了後、活動実施者Aが日本語で挨拶をし、ペルーの紹介を始めた。子どもたちは、ここで初めて実施者Aが日本語を話すのを聞いたが、日本語が分かる安堵感からか、ほほ笑んだり、驚いたりという表情をしていた。

まず、実施者Aがアンケート前の自己紹介で話したのはスペイン語であり、ペルーという国では英語ではなくスペイン語が話されているという言語についての話をした。子どもたちにとっての外国語、とくに欧米の言葉といえば英語を思い浮かべるであろうが、スペイン語という初めての言語を紹介することで、子どもたちの国際理解の幅を広げる一端となったであろうと考えられる。

次に、ペルーという国の地理的な情報の紹介を行った。地図上での位置、国の大きさや人口について説明し、その後、文化の紹介へと進んだ。ペルーには日本では見られない様々な食べ物や動物、多種の民族があり言語も数多く存在していることなどを紹介しながら、国の多様性について子どもたちに考えさせた。またこれらの内容をより深く理解できるように、子どもたちが参加できるクイズ形式の説明も行った。日本とペルーの比較をすることでその違いや共通点が意識できるように配慮をした。

ペルーの紹介が終了した後、10分間の休憩をとった。



Figure 3. 世界地図でペルーの位置を説明

4. 「folklore」についての講義

Folkloreは南米の民族音楽であり、主にアンデス山脈の国々の共通文化である。そのため、楽器や曲がペルー以外の国にも存在することを合わせて説明した。その上で、南米の民族音楽を紹介し、日本の音楽、欧米の音楽と音やリズム、雰囲気が少し違うことを感じ取らせた。

次に、ペルーの民俗音楽を取り上げて紹介し、実際に楽器を見せながら、いつ・どこで演奏されるのかなどを説明した。その際に、子どもたちは、実施者Aの発話する楽器名の聞きなれない言葉に対して不思議そうな反応を示したり、あるいは、声に出して繰り返したりして、その名前を覚えようとするような行動が見られた。これは、異文化であるペルーの民俗音楽に非常に強い興味を持ったことのと表れであると考えられる。

楽器についての説明をしながら、楽器の大きさによって音がどうかかわるのか等の楽器に関するクイズも行った。



Figure 4. クイズに答える小学生たち

5. 実施者によるfolklore演奏

実際に楽器を使ってペルーの音楽—folkloreを演奏して聞かせた。それから、子どもたちに手拍子

を促し、演奏に少しずつ参加させ、最後には歌の指導を行って、みんなでペルーの歌を歌った。本活動では3曲演奏をしたが、ペルーの曲の他にポリビアの曲も演奏した。また、演奏は本来団体で行うものであるため、あらかじめ録音した楽器を元にメロディを笛楽器で演奏した。また今回オーストラリア出身の活動実施者Bも演奏に参加し、ペルーの打楽器で演奏をサポートした。

6. 児童たちの民族楽器演奏・民族衣装着衣体験

演奏終了後、子どもたちは楽器を触って音を出したり、民族衣装を着てみたり、直接ペルーの文化に触れた。子どもたち全員が楽器・衣装に興味を示し、順番にそれぞれを体験した。実施者の指導を受けながら、真剣に楽器について、また、衣装について学んでいた。その後、全員で記念写真の撮影を行った。



Figure 5. 太鼓にどんな動物の皮が使われているのか触って確認

7. 事後アンケート調査

「2. 事前アンケート調査」と同様にアンケートを実施した。簡単に説明をした後、すぐに記入を始めた。活動前後で子どもたちのコミュニケーション意欲に変化が見られるかどうかを測るため、質問項目は事前アンケートとほぼ同じであった。約5分で全員が回答し終えた。

8. 給食

6年生の教室で、子どもたちと一緒に給食を食べた。活動実施者A、Bそれぞれが違う班に入り、英語で会話をしながらの会食となった。子どもたちは、これまでに行われた外国語活動で学んだ英語を使ったり、あるいは、日本語でもコミュニケーションを図ろうと一生懸命になる姿勢が見られた。



Figure 6. 実際に楽器に触れて名前を覚える



Figure 7. 民族衣装を着て異文化体験をする



Figure 8. 授業終了後、音楽教室にて記念写真

IV. 結果と考察

事前アンケートに使用された質問項目はFigure 9のとおりである。事後アンケートの項目は事前アンケートの項目とほぼ同じであるが、問1を「〇〇先生（活動実施者A）の授業は楽しかった？」に、問4を「スペイン語は英語に似ていますか？」に変え、問5の「英語を聞いたとき不安になりましたか？」を削除して実施した。また、最後に自由記述欄を設けて感想を記入する形で実施した。アンケート結果をグラフに (Figure 9), 自由記述をリスト (Figure 10) に示す。

「外国人の人に会うのは初めてですか?」という問いについては全員が外国人に会ったことがあると答えた。現在、N小学校ではほぼ毎週、英語のネイティブの先生による外国語活動を行っており、このような回答結果になったと考えられる。

次に、活動実施者に対する印象を尋ねた問いでは、実施者Aは「こわいと思いますか」に対し、事前アンケートでは「少し思う」が1名いたが、事後アンケートでは怖いと思う児童はいなかった。実施者Bに対する印象は、事前・事後アンケートともに、こわいと思う児童はいなかった。これらの結果を合わせると、子どもたちは外国の人に接することに不安、あるいは、

恐怖心をもっておらず、コミュニケーションという活動を行うことに対しても特に否定的な感情は持っていないと推測される。

スペイン語を聞いたときに不安になったかどうかを尋ねた質問では、「少し」と「すごく」を合わせて12名中10名(83%)の児童が不安になったと回答した。これは、スペイン語が英語と違って聞きなれない言葉であることを子どもたちが認識しており、初めての言語に対する不安感が現れたものと考えられる。

一方、「英語を聞いたとき不安になりましたか?」という質問に対しては、「少し」および「すごく」思うが8名(67%)であった。英語にはなじみがあり、

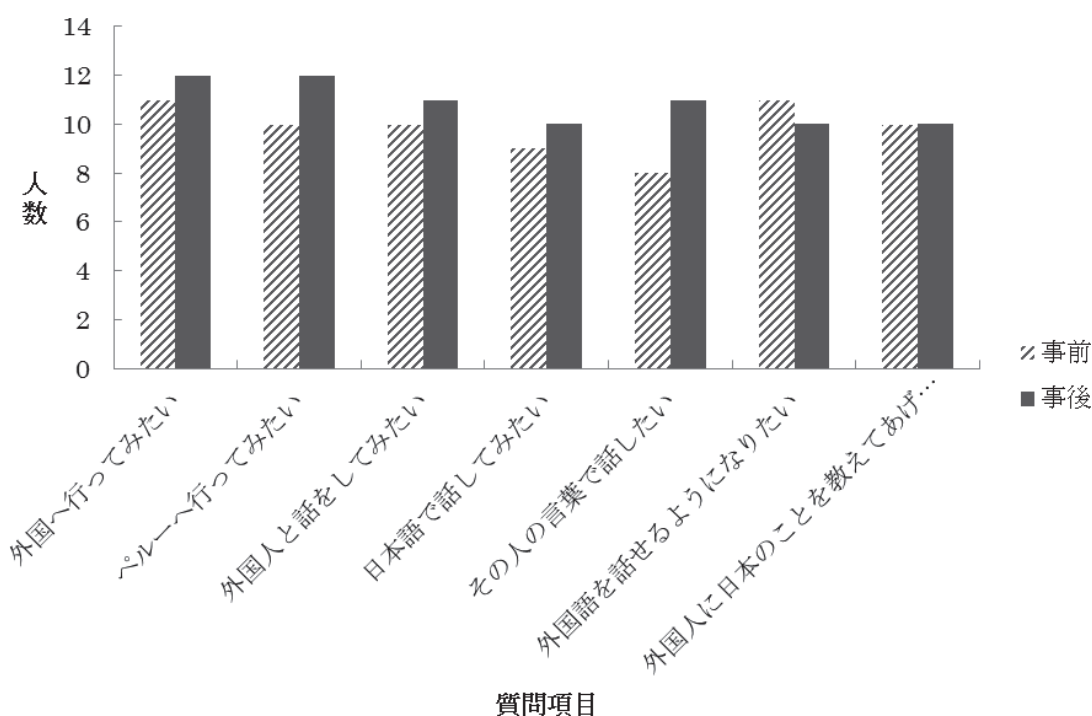


Figure 9. アンケート結果の抜粋

感想

- ・カルロス先生とトニー先生に日本の料理のことを教えてあげたいと思っています。
- ・カルロス先生の説明はとても分かりやすくよかったです。
- ・たくさんの音楽や楽器のことが分かりました。
- ・カルロス先生は日本語、スペイン語、パルレー語などたくさん話せてうらやましいです。
- ・いろんな楽器がいっぱいあってびっくりした。
- ・ちょっと日本とにているところがあるけどちょっとちがったのでおもしろいと思いました。
- ・楽器がいろいろ知らないのもあったりしたのがあっておもしろいもありました。
- ・見たこともない楽器があっておもしろいなと思いました。
- ・初めて見るがっきもあって、おもしろかったです。
- ・すごく知らないこともたくさんあったので色々なことがわかったので勉強になりました。また、勉強してみたいです。
- ・パルレーのことはあまり知らなかったけれど、楽器のほかにも食事のことや人々のこともたくさんわかりました。
- ・ラバンバと言うきょくは私たちがもっていたので、すぐわかってたのしかったです。また、いろんながっきにであいたいです。

Figure 10. 事後アンケートの自由記述による感想

未知の言語であるスペイン語を聞いた時の不安感より低い数字になっている。

「外国へ行ってみたいですか?」という質問に対して、事前アンケートでは「全然思わない」が1名(8.3%)いたが、事後アンケートでは全員(100%)が「少し」「すごく」思うと答えた。また、「ペルーへ行ってみたいですか?」に対して、事前アンケートでは「少し」「すごく」の10名(83%)に対して、「どちらでもない」1名(8.3%)、「全然思わない」1名(8.3%)であったが、事後アンケートでは、「少し」「すごく」合わせて12名(100%)となった。この結果から、今回の活動を通して、子どもたちの外国、そして、ペルーへの興味が増したことがうかがえる。

「外国の人と話をしてみたいですか」に対して、事前アンケートでは「思わない」「全然思わない」と回答した児童がそれぞれ1名いたが、事後アンケートではこれらの項目は0名となった。この項目は、子どもたちのコミュニケーション意欲を表しており、活動前にも83%の子どもがコミュニケーションに対する意欲を示していたが、活動後100%となった。これは、活動を通してペルーのことを知り、ペルーや外国に対する興味が増したことから、外国人の人と話してみたいと考えられる。

「外国の人とその人の言葉で話してみたいですか」に対して、事前アンケートでは「思わない」「全然思わない」を合わせて2名(17%)いたが、事後アンケートでは11名(92%)が「少し」「すごく」話してみたいと回答した。この結果から、子どもたちは外国語でのコミュニケーションに対しても積極的であることがわかる。

「英語やほかの国のことばを話せるようになりたいですか」という問いに対しては、事前・事後大きな変化はなかった。

「外国の人に日本のことを教えてあげたいと思いませんか」という問いに対しては、事前アンケートでは「思わない」が1名いたが、事後アンケートでは0名になった。また、事前アンケートでは「少し」および「すごく」思うが各5名であったが、事後アンケートでは「少し」が4名、「すごく」が6名になった。この結果は、子どもたち自分自身が持つ知識を他の人に伝えたいと思う気持ちの表れがうかがえる。

以上の結果を総括すると、本活動に参加した小学6年生の児童のコミュニケーションに対する意欲は、ペルーについて学び、体験した後が高くなっていると言える。前述の、高学年の児童は中学年に比べて認知的

に発達しているため、楽しいだけで動機づけを高めるのは難しい(阿部, 2009)とする知見に照らし合わせると、本研究から得られた結果は、相反するものとなっている。これは、今回の活動が、児童たちにとって楽しみ以上のもの、たとえば、興味、好奇心、向学心等につながり、コミュニケーション意欲を高める結果となったと考えられる。

日本の小学校で英語が導入され、より幼い段階で外国の先生と触れる機会が持たれるようになった。このように外国の人と触れ合うことは子どもの外国に対する意識の構造に大きく影響すると考えられる。

しかし、英語教育の範囲だけでは国際理解が十分とは言えない。英語圏以外の国を知り、外国=英語、またアメリカ=外国という概念を修正することも小学校の外国語活動等で必要であろう。

小学校では今後、外国語活動では英語を中心に進められるであろうが、異文化教育という側面においては、諸外国の紹介を含め、子どもの世界に関する正しい知識の育成が望まれよう。日本には欧米からの外国人だけでなく、アジアや南米をはじめとする日系人たちも数多く生活をしている。彼らの文化を知ること、子どもたちにとっての国際理解の第1ステップと考えられる。

以上を踏まえ、今後は、参加者を増やして同様の活動、および、調査を行い、得られたデータを統計的に分析することによって、本研究で得られた知見の追認・検討が求められる。

引用文献

- 齋藤孝(2004). コミュニケーション力 岩波書店
- Hymes, D. (1972). On Communicative Competence. J. B. Pride and J. Holmes, (eds.) Sociolinguistics. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Education, 269-93.
- 広瀬文彦・幡山秀明(2012). 英語教育と文学的教材 [14] コミュニケーション能力の素地を養う効果的な外国語活動の指導法-その第1歩, 学級担任(HRT)の役割- 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 35, 311-318.
- 阿部始子(2009). 年間授業時数やALT参加頻度の違いが小学生のコミュニケーションへの意欲に与える影響 Language education & technology 46, 171-189.
- MacIntyre, P., Cramon, R., Dornyei, Z. & Noels, K. (1998). Conceptualizing Willingness to

Communicate in a L2: A Situational Model of L2
Confidence and Affiliation, *The Modern Language
Journal*, 82, 545-562

廣岡秀一・中西良文・廣岡雅子・後藤淳子・横矢規・
矢神祥代・福田真知 (2005). 小学生のコミュニケー
ション力を高める教育実践(2) -教育学部・教育
学研究科教育心理学学生によるボランティアな取り
組み- 三重大学教育実践総合センター紀要, 25,
37-45